

違法薬物がらみの軽い捕り物の筈だったのに、FBI がのさばってくるとかは聞いていなかったのだが、と降谷は溜息を吐きながら風見に掛けられた薄手のロングコートと、その下に隠していたバニーガールからウサギ要素を消しただけのような際どい衣装を脱ぎ去った。肩口に小さな黒い翼と尻に尾があったのでどちらかと言うと悪魔かもしれない。だが、それは別にどうでもいい。

際どい衣装ではあったが、この一週間ほどずっと着込んでいたので、それなりに馴染んでいるのが自分でも少しばかり笑えると思いながらさっさと脱ぎ棄てて降谷はシャワーブースに向かった。

「あー、そうだ。これどうしたもんかな……まあ、一週間赤井に会わなければいいのか」

そう呟きながら下腹部を見下ろすと、そこにはタトゥーのような模様が残っている。オーガニック成分で出来ているタトゥーシールだ。2 週間は持つという評判だったので都合がいいと貼ってみたのだが、こんなに早く片付くと思っていた以上、厄介なものに変わってしまっている。

いわゆる淫紋の柄、と言われても降谷としてはそういうジャンルがあるのかと思う程度で放置していたが、子宮とそこに突き込まれている男根を模したものだろう模様は単色ながら毒々しく降谷の下腹に残っていた。

一週間前倒しになったということは、この柄が消える前に赤井と会う可能性が増えたということである。

タトゥーは当然ながらまずいとして、この柄が残っている時点でかなり危険だった。

(……擦ったら少しは消えないかな?)

そう思いながら、備え付けのボディソープを付けて下腹部を幾ら擦っても、色は落ちる気配すらない。本当にしっかりと皮膚に浸透しているようだ。2 週間は持つと言われてはいたが、業務が終わった以上こんなものは付けておく訳にはいかない。そもそも、こんなものを肌に残しておこうものなら、赤井が。そう考えた瞬間に、シャワーブースのドアが叩かれた。

入ってます、と答えかけた所で降谷は相手の気配に気付いて言葉を飲んだ。だが、それで通じる相手でもない。

「降谷君、出てきなさい」

低い声に、ひゅっと喉が鳴る。これを赤井にさらそうものならどう苛まれるかわかったものではない。喉が鳴ったのが聞こえたのか、静かな声がもう一度降谷を呼ぶ。

「降谷君、」

「す……みません、ちょっとシャンプー流すまで待っ、」

て下さい、と言いかけた瞬間に、ばきりと嫌な音がした。恐る恐る振り向くと、ドアノブが明らかにおかしな角度までひねられている。そのまま、ドアがゆっくりと開けられた。咄嗟にタオルで前を隠したが、それを見た赤井がふっと鼻で笑う。

「君もそんな可愛い真似をするんだな」

「可愛いとか……っていうか、器物損壊……！」

「後で弁償するさ。それよりも降谷君、何を隠しているのかな？ シャンプーもまだのようだが」

その言葉と共に無造作にシャワールームに踏み入ると、赤井は降谷が動けないでいるのをいいことに容赦なく喉元を右手で捕まえた。暴れようとする、ぐ、と容赦なく喉を締められるので動けない。

それでも隙を見て一発入れてやろうと思っていると、赤井は降谷のそんな様子を見透かしたように小さく笑ってからタオルを剥いだ。そこで現れたものに、軽く口笛を吹く。

「なかなか、趣味のいいものを入れたものだな？ ん？」

言いながら下腹を撫でられて、ぞくりとするものを感じながらも降谷は小さく弁明する。

「……シールですよ。皮膚に浸透するタイプの。彫った訳じゃありません」

「うん、彫っていたら上から追加で何か入れさせていたな」

それはどういう、と思っている間に赤井は降谷の全身を確かめるように検分すると、よし、と頷いて手を放した。意味もなくけほ、と咳き込むと、少し締めてしまったかと心配そうに撫でてくるから性質が悪い。

「何だ、隠していたのはキスマークとかでもなくただのシールだけだったのか」

「……キスマークとか、そんなものあなた以外に付けさせるわけないでしょ」

そう言うと、赤井が僅かに目を瞞った後にそれならいいが、と笑う。

よかったこれで説教回避、と思った次の瞬間だった。ひょいと俵抱きにされて降谷は思わず足をばたつかせる。

「ちょっ、何、赤井、」

「それで、その可愛い模様を何人に見せたのかな？ あの際どい衣装を着て」

あ、説教回避できなかった。

そう思っている間にブースから連れ出されて、持って来ていたタオルで全身を丁寧に拭かれる。この男に世話をさせるのは悪くない、が、状況は悪すぎる。

「ここでは話せないなら、話せる場所で教えてもらおうか？ 何、機密事項は聞き出さないと。ただ、君がどんな相手にどんな媚態を振り撒いていたのかを教えてもらいたいのだけだよ」

全部素直に話すな？と言われて、降谷はそっと息を吐いた。拒めば説教とお仕置き、拒まなくても話したご褒美という名目で、どちらにしてもひどい目に遭うのが確定している。

どうしたものかと思っている間にいつものスーツまでしっかり着せ付けられてしまった。

ネクタイもきちりと締めてから赤井は小さく笑って降谷の下腹部を撫でる。

「この下にあれがあると思うとそそるな」

「……少しは黙っていただけますか。あと、後始末が終わってないので話はそれからです」

「話をする気が合ってよかったよ。こちらも書類が発生したからな、後で一緒に帰るとしようか」

そう言われて、降谷は心底拒否したいと思ったものの赤井の目の中に底冷えのするよう

な色を見て諦めて頷いた。

「わかりました。こちらも報告書を上げたら一時帰宅なので、その時に」

そう言いながらも、どうやって逃げたものかと降谷は内心で無駄な思考を止められずにいた。この後、どうなるのかなど考えたらおしまいだと思ったので。